ライトノベルから触れる文学の世界
―きっかけは、本を食べる妖怪でした―

外国語学部
英語英文学科３年
長瀬 絢香

ライトノベル。一見すると英語のように思えるが、これは和製英語である。しかし、現在は日本の小説のジャンルとして、認知され始めている。ライトノベルには、決まった定義が無い。マンガのようなキャラクター設定や背景、イラスト、また、若者向けの物であるなど、様々な要素は挙げられるが、広い範囲で、これに類するものをライトノベルという。だいたいどのようなものであるのかは、アニメにもなり、有名な『涼宮ハルヒ』シリーズを想像していただきたい。

ライトノベルは、マンガやアニメのような設定が多いので、非常に読みやすく、もちろんそのジャンル自体の質も高い。ライトノベルの一つの特性である読みやすさ。それを活用することで、本格的な文学の世界への扉を開いてくれる作品がある。その、文学の世界との橋渡し的役割を果たしてくれるのが、筆者の紹介したい『文学少女』シリーズだ。

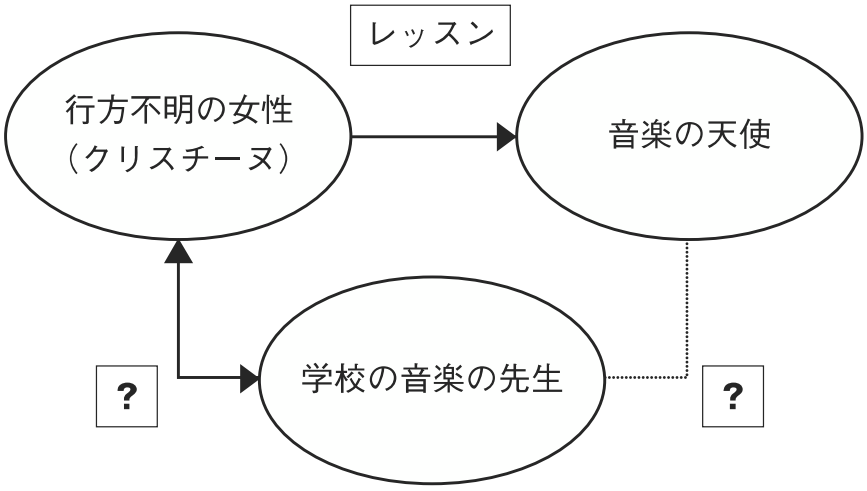
『文学少女』シリーズは、ファミ通文庫から発行されているライトノベルである。文章は、主人公の少年の目線でかかれている。主人公は、井上心葉（いのうえ　このは）という高校1年生。彼は、「井上ミウ」というペンネームで、中学生の時、史上最年少で文学賞を受賞し、その名前から、「謎の天才文学美少女」ともてはやされる。しかし、そのことによって、彼のガールフレンドであった作家志望の少女、朝倉美羽（あさくら　みう）が突然姿を消す。それから彼は、二度と小説は書かない。と心に決め、美羽を失った後の引きこもりの生活からなんとか這い出し、高校に入学する。

ある日、彼は学校に生えている木の下で、不思議な光景を目にする。それは、本を読んでいた少女が、そのページを破り、口の中に入れて食べるという奇怪極まりないものだった。この少女こそが、このライトノベルのタイトルである「文学少女」、天野遠子（あまの　とおこ）その人である。彼女は、文芸部の部長であるが、部員は彼女しかいない。心葉は、遠子の秘密を知ってしまったがために、彼女が部長を務め、部員が彼女しかいない文芸部に入部させられ、よりにもよって、二度と書かないと決めた小説を、彼女のために「おやつ」と称して毎日書くことになってしまったのである。

この物語の主人公たちは、皆何かしらの闇を抱えている。主人公だけで言っても、心葉は美羽を

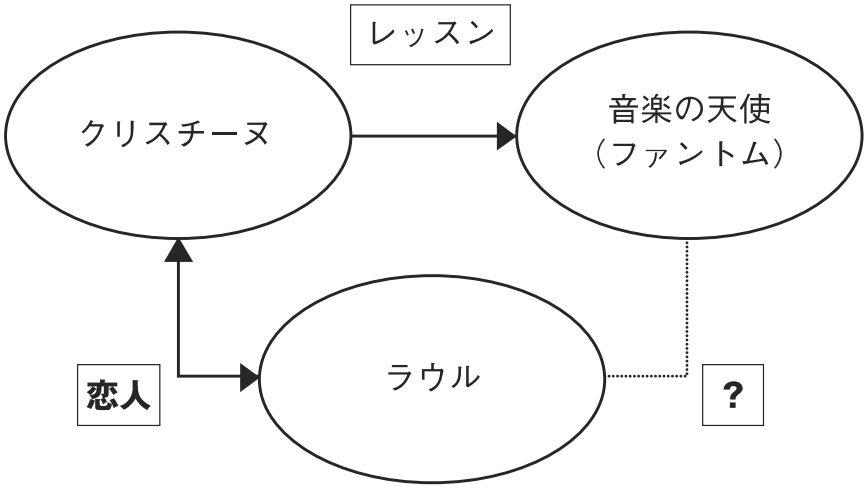
失った後、日常生活に復帰しても、美羽のことを思い出すと時々過呼吸のような発作を起こす。天真爛漫で天然なキャラクターとして描かれる遠子も、本でしか味覚を感じられないという体質をもち、それを悟られないように日々の生活を送っている。そして心葉は、それでも常に前向きに生きようとする遠子や、各巻に出てくる登場人物との触れ合いを通して、少しずつ成長していくという物語である。

では、この物語のどこが、文学の世界への架け橋となるのか。それは、毎回彼らが巻き込まれる問題や、その謎を解く鍵が答えである。このシリーズは、各巻のお話が、全て有名な文学作品をベースにして作られている。例えば、『オペラ座の怪人』がベースとなった回では、オペラ歌手を目指して音楽の有名学校に通っていた、主人公の友人の親友（女性）が、ある日突然行方不明になるというところから始まる。そして、彼女は、「音楽の天使」から秘密の特訓を受け、急激に歌手として成長している最中であったという。「音楽の天使」とは、原作『オペラ座の怪人』に登場する怪人ファントムのことである。そうなると、行方不明になった彼女はファントムから秘密の特訓を受けていた歌姫クリスチーヌということになる。心葉たちは彼女の行方を探すとともに、謎を解いていく。このように、毎回有名作品をベースに置き、現実世界と融合させることによって、原作の大体の内容をつかむことが出来る。そして、原作にそったように次々と出来事が起こり、結末まで進んでいく。



文学少女の人物相関図

もっとも印象的なのは、「文学少女」である遠子が、「想像」で真相を突き止めるクライマックスのシーンだ。彼女は、先ず原作者の紹介から始まり、原作の大まかな内容、そして結末までを簡単に説明する。そして、『オペラ座の怪人』というファントムは誰であるのか、クリスチーヌはどうなっ



オペラ座の怪人の人物相関図

たのか、彼女の恋人ラウルは誰なのか、と、原作を交えつつ答えを導き出し、解決してしまう。登場人物一人一人のキャラクターにまで焦点を当てて説明していくので、読者はその文学作品に感情移入しているような気分になる。まずここで、原作への興味が湧く。そして、本当の登場人物たちのキャラクターをもっと知りたくなり、文学少女を読み終えた後、原作に手を伸ばすのだ。

『オペラ座の怪人』は、顔の醜さ故に愛されることを知らなかったファントムが、クリスチーヌと音楽を通して通じ合い、彼女に恋をするが、報われないという、ファントムの悲しい話である。しかし、遠子の言葉が、私たちをさらに原作へと導く。「『オペラ座の怪人』というのは、そういう物語なのよ。けど――だからこそ、この物語は哀しみにあふれていて、美しいわ。暗く退廃的な美に彩られたゴシック小説が、ファントムが見せた真実によって、最後の最後に、胸が震えるような、透明な物語に変わってゆく――。」、「物語を読み終えたとき、多くの人たちは、ファントムの哀しみに胸を打たれ、彼が歩んできた道がどんなものであったのか、物語に残された手がかりを頼りに、考えずにいられない。そして、どんな形であれ、彼が救われるよう願ってしまうのよ。物語を読み終えたとき、ファントムは、現実に存在していた人間のように感じられるわ。クリスチーヌは、ファントムを選ばない。だけど、読者はファントムを忘れない。ファントムの嘆きを、ファントムの生を、ファントムの愛を、忘れないわ。仮面を取り払った醜いファントムをこそ、あいするわ、、それは、『オペラ座の怪人』を最後まで読まないと分からないのよ――。」最後まで読まないと分からない。それはまるで、この文学少女の世界で起こった事件の真相も、原作を読んで初めて本当に理解できると言わんばかりだ。しかし、実際に、原作を読むことによって、より文学少女の世界の人物たちの葛藤や、物語の深さがよく分かるのである。

参考 野村美月著／ファミ通文庫
『"文学少女"と穢名の天使（けがれなのアンジュ）』
『"文学少女"と死にたがりの道化』

▲ 天野遠子

そして、知らず知らずのうちに、有名な文学作品をいくつも読んでいたことに気付く。『人間失格』、『嵐が丘』、『友情』など、難しそう、堅そうだと思っていた文学作品達が、文学少女の力によって、身近なものへと変わっていった。

ライトノベルという文字通り"ライト"なものの力で、本格的な文学を"読まされる"のではなく、自分から手にとって読むという、一つレベルが上がったような読書ができるようになる。このような機会、作品は中々無いと筆者は考える。ぜひ、教養をつけたいが文学作品はとっつきづらいと思っている方に読んでもらいたいライトノベルである。既に原作に触れている方は、復習のつもりで読んで、文学少女が原作の世界といかに巧みにリンクしているか、驚いていただきたい。

▲ 井上心葉